

時間停止して

生意気女上司の処女を
ガバガバにした



時間停止して生意気女上司の処女をガバガバにした

一卷

弾

同人サークルぶるずあい

表紙・挿絵 弾 (stable diffusion)

目次

女学生編	序
女学生編	破
女学生編	急
受付嬢編	序
体験版後書き	

37	32	30	12	7
----	----	----	----	---

女学生編 序

スーツ姿で出勤しようとしていた朝。駅のコインロッカーの前で、俺は我が目を疑った。あの爺がまたいたのだ。俺に時間停止魔法を授けた仙人の爺が。

「待っておったぞ肝川○男……これからお主には世界を救ってもらう」
そして、爺は懐からあのサルミアッキのような味がする丸薬を取り出した。

夢……じゃないよな？ 爺は俺に丸薬を渡すとそのまま消えた。俺は迷わず丸薬を飲んだ。
うん……しつかり不味い。

時よ、止まれ！ うん……やっぱり時間が止まっている。あの時と一緒だ。

ふうくと俺は深呼吸する。朝のいつもの駅の空気だ。春らしく涼しくて心地良い空気。しかし……何だ？ 世界を救う？ 意味が解らん、いったい何をすればいいのだろうか？ 爺は何の説明もしなかった。

好きにすればいいのだろうか？ うん、いざ魔法を授けられても、何からしたら良いものか。とりあえず時を元に戻して逡巡した。

「あつ……肝川さん……おはようございます」

「おつ、ああ、ももちゃんおはよう」



そこに立つは夢の爆乳、黒髪ボブカットを揺らし、なんだかミルクを思わせるとてもいい匂いのする、男の憧れ女学生こと、桜井ももちろん。俺のご近所さんだ。

彼女はスタイルが抜群、きゅつとくびれたウエスト、スカートにギリギリ収まる大きな尻。背は俺より少し小さく、上目遣いに俺を見上げる。その容貌は天使ようぼうのような美人さんだ。

「今日も学校かい？」

「あつ今日は部活の用事でちよつと違う駅に行くんです」

そう言っていつもとは違う電車を指さした。

「ああ、そうなんだ」

これはむしろ好都合だ。実は俺ともしゃんは仲が良い。以前痴漢から助けてやったことがあるのだ。別に正義感など微塵もない。ただ俺が狙っている女に手を出す奴は容赦せん。

でもお、ちよつとエッチな悪戯いたずらしちゃおっかな♪。

「うふふ、なんだか肝川さん、上機嫌ですね。良い事でもあったんですか？」

「ん、ああ、久しぶりに大事な友人と会ったんだ」

うん、まあ、ウソは言ってない。

「そうですか、私も良い事がありました。書道部のコンクールで入賞したんですよ」

「おお、凄い！ ももちゃんおめでとう」

そうなんだよなくももちゃんって大和撫子なんだよなく。でっかい筆を使って、巨大な紙に

複数人で文章を書き上げる。いわゆる書道パフォーマンスで有名な学校に在籍してるんだと、ももちゃんの母親から聞いた。

「部活楽しい？」

「ええ、とつても楽しいですよ」

うーん、こんな良い娘を毒牙にかけるのは、ちよつと気が引けるが……。

俺は改めてももちゃんの身体をつま先から頭までみた。うーん、脚が長いモデルスタイルに、この爆乳、男心をくすぐりまくるその美貌。

ちよつとだけ……ちよつとだけ、エッチな悪戯をしちやおう。

「あの、私そろそろ行きますね」

「うん、部活ガンバ！ ももちゃん」

「はい！」

ももちゃんはそう言うのと、いつもとは逆方向へ向かう電車に乗った。

俺はいつもの電車に乗ったところで時間を止める。そしてモモちゃんが乗った電車に移る。ももちゃんにばれないよう二つほど離れた車両に乗った。

そんなことをすれば出社時刻に間に合わなくなるが、幸い俺の会社は今いるところからそれほど離れていないところにある。時間を止めて自転車か徒歩でいくという手もある。まあ、何とかなるだろう。

俺は時間が止まった周囲を見渡す。スケベそうな顔をしたサラリーマン風の男がドリンク剤の入った袋を持っていた。

「一本失敬」

ドリンク剤をグビグビ飲み、精力が溢れてくるのを感じる。

さあ、ももちゃん、楽しませてもらうよ。

女学生編 破

まず、俺は時間停止状態のももちゃんをじつくりと見た。うゝん睫毛長いな。目元が凄くぱっちりしている。ちよつと睫毛を引つ張つてみた。うん、付け睫毛とかじゃない。

次いで全身の匂いを確かめる。香水なんかは使っていないようだ。それでも凄く甘くて良い匂いがする。

髪はフローラルシャンプーの匂いだ。ももちゃんの髪の中に鼻を突っこみ、胸いっぱいになるまでその香りを吸引する。ああ……清々しい。

若いバカDONもシンナーなんか吸わないで、美少女の髪の匂いを嗅げばいい。タバコなんか吸うよりもずっと良い気持ちだ。美少女の髪の匂いを嗅ぐのは健康にも良さそうだ。最高のアロマだな。

次はももちゃんの右手を上げさせて、腋の匂いを嗅いだ。ああ、甘いミルクのような香りがする。汗はあんまりかいていないようだ。これは天然の女の子の香りなのか。ももちゃんは選ばれた女の子なんだな、と改めて思った。

以前バレー部だと思しき女の子の集団と、真夏の電車で一緒になったが、普通に汗臭く、辟易したものだ。文系の書道女子のももちゃんは、奴等とは格が違うな。

うゝん、これはミルク？ いや、メロンパンのような香りか？ とにかく甘くて良い匂いだ。

香水と同じくらいの良い匂いで、何かで付けた匂いかなとも思うが、これはどうやら天然由来の香りのようだ。

さて、次はオマンコを確認しよう、可哀そうだからハメたりしない予定だが……いや、やっぱりハメたい。

とりあえずショーツを下ろし、座席に腰掛けるもちちゃんの秘部を確認した。

おお……素晴らしいピンク、びらびらした大陰唇も色素が薄く可愛らしい。

クリトリスに恥垢は無かった。たぶんクリオナニーはするんだろなと思った。小さな真珠はピンク色でわずかに包皮から顔を出している。触ってみるとコリコリ感が強く、俺の経験からして感度の高い好きモノのクリトリスだった。

その下に見える尿道口も控えめで、こんなところまでもちちゃんは大和撫子^{やまとなでしこ}だった。

さてさて一番重要な膣口はどうだ？ ラビアを開いてそこを覗き込む。むむ、これは二つ穴状処女膜か、処女膜に開く二つの穴をまたぐ細い粘膜のラインが、もちちゃんが処女であることを示していた。

「グット！ グウウット、やっぱり俺のヒロイン、純潔はバッチリだな。時間停止されて、知らないうちに処女喪失するのは可哀そうだが。うゝむ、已むおえないか、やっぱりもちちゃんとセックスしたい、したすぎる！」

処女膜にちよつと浮かれすぎたな。どれどれ匂いはどうだ？ 俺はくっ付かんばかりに秘部

に顔を寄せ、すんすんと音を立てながら匂いを嗅ぐ。鼻にツンとチーズ臭が香った。おお、処女臭だ。

ベイクドチーズケーキを思わせる香ばしい匂い。わずかにフルーツの様な甘酸っぱさがあり、こんなところまで綺麗にできている純潔の乙女を前に。俺は涙が出るくらい感動した。

「よし！ ちょっと舐めてみよう」

じゅぶ、じゅぶぶぶ、じゅぶちゅつ、じゅぶぶぶぶ。

うん、美味しいじゃないか。匂いが臭くないのはもちろんだが、このヴァージンチーズは激ウマだぞ。選ばれし膾炙常在菌なんだな。

俺は秘部に唾液を絡みつけるように、処女膜を舐めた。愛液の味を確かめたかったが、時間が停止しているので、濡れてこない。

よし、俺は次にクリトリスを丹念に舌で転がした。オナニーで微開発されているだろう、処女の数少ない性感帯を心いくまで弄^{もてあそ}んだ。

「うん！ こんなもんか」

俺はももちゃんに見つからないよう距離を取る、スーツの上着をバックにしまい偽装して、立っている背の高いサラリーマンの陰に隠れた。

時よ動け！俺が念じると、途端に世界の音が甦った。

「きゃっ♡！ な、何？」

ももちゃんが驚いて辺りを窺う。頬が赤く染まっているのを俺は見逃さない。ふふ……感じたな。

やはり以前の時間停止と一緒に。性感を刺激して時間停止を解くと、一気に性感が押し寄せらるらしい。

時よ止まれ！ 俺は再び時間停止して、ももちゃんの元へ移動した。

おお……処女臭が開いてきているじゃないか。陰部が蜜を含むことで匂いだし、甘酸っぱいチーズ臭がさつきとは比べ物にならないくらい香った。

秘部を見ると明らかに愛液が滲んでいた。

「どれどれ……」

花開いた秘部へ口を付け、愛液を味わう。感じ始めの愛液だから粘りがあつた。味は薄く甘い、愛液そのものは微かに甘い匂いがあるだけだった。しかしヴァージンチーズが溶けだして処女臭が凄かった。

「ふうう……甘露甘露、何てプリティーなおマンコしてるんだ、ももちゃん」

オマンコを堪能して、ふと顔をあげると、けしからんほどに育った双丘が目飛び込んできた。

うん……良いおっぱいだ。俺はももちゃんのブラウスのボタンをはずし、おっぱいを露わにする。

うおおお……凄い爆乳、これは予想以上だった。白磁のように白い肌に、綺麗なピンクの乳首がふたつ。淡い色の乳輪はけっこう大きい。

揉むと手からこぼれそう。柔らかさも半端ない。でもおっぱいにちよつと芯がある。遊んでないおっぱいだ。よく揉み込んでほぐすことにしよう。

指を沈めると卑猥に双丘は変形し、若くて張りのあるおっぱいだから、けっこう反発してくる。弾力もいいの。

おっ、乳首すでに立ってんじやん。マン舐めで感じちゃったのね。乳首を指でつまむと、コリコリと硬くなっている。グミの様な弾力もあって嬉しいねえ。

コリコリコリコリコリ。

やっぱり乳首でも感じるのかな？ 感度が良いようなら徹底的に攻めたいな。よし、俺ははだけた胸をブラウスにしまい、ボタンを直す。元通りの服装だ。

再びももちゃんから距離を取ると、時間停止を解除してみる。

「あっ♡ ふああんっ♡」

ももちゃんの口から甘い嬌声がでると、一瞬だけまわりの視線を集める。ももちゃんもそれに気が付き、頬を染めて俯いた。

やっべえ……しっかり感じてやがる。

周りの男たちが、ももちゃんからする甘酸っぱい匂いに気が付いたらしく、陶然としている。



淫夢でも見たのかと思ったんだろうか。

時よ止まれ！ 俺は三度ももちゃんの元へ駆け寄る。

ブラウスのボタンを外し、爆乳を露出させる。おっ♪サイズアップしたか？ 乳房に血が集

まっているようだ。

おお、弾力もアップして、揉み応えが凄い。

俺はもちゃんのおっぱいへ顔をダイブさせた。

うっほおお、密着すると息もできん。顔が全て覆い尽くされるとは、何たる巨乳。そして、微かに汗ばみ始めた乳房からは例のミルク臭が立ち上る。そのミルク臭を肺の奥まで満たさんばかりに吸引する。

つぶはああっ！ おっぱいの海に溺れてしまった。たまらんなあ。

しかしこの歳で、セックスもせずよくここまで大きな乳房に育ったな。クリトリスオナニーだけでも女性ホルモンは十分だったのだろうか？ この処女を奪えば、眠れる獅子を起こすことになるのだろうか？ 楽しみすぎる。

「ももちゃん！ 好きだ！」

本人を前にとっても告白などする勇気もないが、この時間停止世界ではももちゃんは俺のものだ。

うおお……ペニスに力が漲みなぎってくる。ちよっとおっぱいで挟んでみよう。

柔らかな双丘を開き、ペニスを挟み込んでみる。おお……俺の平均よりはややデカイペニスが全て埋もれてしまった。程よく温かな体温と、ピツタリと貼りつくキメの細かい肌。

オマンコほどの刺激はないが、これはこれでとても気持ち良い。

まさかもちやんでパイズリができる日など来るとは思わなかった。ありがとう仙人の爺さん。

ゆっくりと腰を動かすと、乳圧に溺れた愚息から、じんわりと性感がしてくる。高まって精をこぼすようなことはない。しかし気持ち良さは素晴らしかった。

くっくくくくちゅ……くちゅ。

先走りの汁がこぼれだして、もちやんの胸の谷間を汚す。それが潤滑剤となって、パイズリはどんどん気持ち良くなってきた。

「うん……うん、パイズリで一本抜くべきか？ いや、やはりオマンコの中で出したいな」名残惜しいがおっぱいはしまつて、ブラウスのボタンを戻す。いきなり電車の車内でおっぱいがまろび出たら大事だからな。

俺はもちやんを座席から降ろすと、俺の腰を跨ぐまたような姿勢にする。背面からど迫力のお尻が眺められる。

ペニスを慎重に膣口にあてがう。少しだけ膣口が開くと、中から蜜が溢れてきた。クリ舐めと乳首責めでやつぱり感じたらしいな。

「それでは……いただきマンコ」

挿入するとまずペニスがコツンと障壁に当たった。処女膜がわずかに抵抗してくる。乙女なんだな。

そのままゆつくりと進むと、抵抗が増してくる。

カリの一番太い所が、粘膜の輪っかを通り過ぎた。

ぶつ！ ぶち。ぶち。ぶちつ！ ぶつつんっ！

十八年ももちゃんの膣を守っていた。薄膜の封印が今解かれる。

「うおおお……キツイ！ こんでもってヒダヒダが凄いだぞ」

このキツマンこそまさに処女の醍醐味だいごみずつと守られてきた。聖域の感触。

ももちゃんの膣は早熟で、すでに膣壁のツブツブは柔らかくなり始めていた。

これ……大人になったら凄いだ。俺は思わず嘆息する。

ゆつくりと膣を進んでいくと、ところどころ粘膜が癒着していて、それをペリペリと剥がしながら進むのがたまらん。

これは、入り口がよく締まる巾着名器だな。処女膜だけじゃなく、先天的に膣口が締まるタイプの子だ。

熱くて柔らかくて、中まで蕩とろけている。この濡れやすさも名器だな。たぶん感じやすいんだろ。



輪ゴムのように締まる膣口も、すでに亀頭が通り超え、ペニスの根元を締めている。そして……コツン……と俺は最奥へたどり着いた。コリコリとしこるのは子宮口だ。

この時点でもちちゃんの膣の全貌が明らかにになる。

まずその最大の特徴は巾着名器だ。まだこそげ落ちてない処女膜と合わさり、逸物を締めつけてくる。ここを起点にペニスをしごいていけば、最高の快楽が得られるだろう。

まだ女学生の膣は若く少し筋肉の強張りが残っていて、わずかに硬い印象を与えてくる。膣のヒダヒダは複雑な形で、ツブツブもすでに十分な大きさになっていて、ペニスに絡みつく。

「うん……女学生としてはほぼパーフェクトと言ってもいいな」

思わず感想が口をつく、うなってしまうくらい、良いオマンコだった。

裂けた処女膜から、サクランボ色の雫が一筋たれた。これでもちちゃんも女になったのか。

うーん、ももちろん痛がるかな？ できるだけもちゃんには酷いことをしたくないが、時間停止しないとセックスなんて出来ないからな。

とりあえず、破瓜で痛むのか確認しよう。俺はショーツを戻し、元の座席に座らせると、まとももちゃんから距離を取る。

時よ動け！ さて、どうなるか？

「いつつ！ 痛いっ！ きゃふうん♡」

やっぱり、痛かったか、でもちよつと甘い声も混ざっていて。痛いだけじゃなさそうだった。
「なっ……何？」

ももちゃんが動揺していた。下腹を押さえて、目が潤んでいる。

おっけい、おっけい。そこまでの激痛じゃなさそうだ。時間よ止まれ！

また静寂が辺りを包む。ではセックスを楽しもうじゃないか。

ショーツを脱がし、スカートをまくり上げ、ももちゃんをΣ字開脚して、正常位の姿勢にする。

「再び！ いただきマンコー」

おっ！ 背後から入れるのとはまた違うな。亀頭に微かにざらつく天井が当たる。

ももちゃんのスポットか、そこはまだ完全に発達してはいなかった。もう少し成長すれば素敵なカズノコ天井になりそうだが、そこがまだ未熟な女の子を相手してるんだなと感じさせて清々しい。

こんな気持ち良い膣なのに、さらに所々に伸びしろを感じる良い名器だな。

しかし、仙人の爺さんは、俺に世界を救えとかいつてたな。いくら何でも、ももちゃんとセックスしても世界は救われんだろうな。まあ爺のたわごとかもしれないのであまり気にしないでおう。

そんなことより、ももちゃんの処女だ。正常位の姿勢でじつくりかき混ぜていくと、少しずつ

つ筋肉の強張りがほどけてきて、絡みつきが増してきた。

亀頭のカリにツブツブが当たって、うほお……たまらん。

俺はずいっとペニスを抜いて、カリで処女膜を擦ると、またずいっと亀頭を子宮口まで入れた。このワンストロークに複雑で色々な性的快感がある。

「はあ……やっぱりもちゃんは最高の女学生だ……ホント結婚したい」

可愛のときのようにガバガバにすることはしない。あれはビッチへの天誅だからな。

大人になったら、処女とは違う良い名器になりそうだから、じっくりと育てたい。しかしいつまで俺に時間停止魔法が使えるかはわからない。たぶん世界とやらを救った後には爺は俺に魔法を残さないような気がする。前回もちよつと悪事に使ったら、すぐ使えなくなったからな。しかし、ももちゃんの膺が開いてきたぞ。キシキシした強張りがなくなつて、絡む絡む。キツキツ感はいまだ健在だし、処女膜もちよびつとだけ削れてきてしまったが、まだまだ締まる。

あ……やばい。そろそろ出そうだ。

時間停止状態だから、どれくらいコイていたかわからないが、たぶん、十五分から二十分、限界がやってきた。

「大好きだよ！ ももちゃんっ！ 愛してるううん！」

どびゅっ！ どびゅびゅびゅびゅっ！ どつびゅううん！

甘痛く疼く睾丸から痛みが抜けていく、前立腺を通り尿道へとマグマが駆け巡る。

かっと目が覚めるような、強い性感が俺を襲う。ペニス全体が怖ろしい快感に包まれて、もう、死んでもいいくらい気持ち良い。

何度も小突いたせいで、子宮口が開いてしまったらしく、精液はあまり逆流することなく、ももちゃんの子宮へ注ぎこまれた。

ああ……あのももちゃんに、無責任種付けエッチをしているのか……ちよつとやり過ぎたか……許してくれ、ももちゃん……君の素晴らしすぎる身体がいけないんだ。

ふっ……ふううう……素晴らしい気持ち良さだった。

一旦引き抜くと、わずかに精液が膣口からこぼれた。うおお……エロティックだ。

汚されてしまったももちゃんの花弁を見ていると、また欲望がムクムクと頭をもたげた。いかん……フルボッキしてしまった。やっぱり一発じゃ物足りない。五発くらいはいけそうだが、あまりやり過ぎるとせつかくの名器が台無しだからな。でも、とりあえずもう一本。

俺は再び、彼女の聖域に不法侵入した。

奥のほうからドロリとした俺の精液が溢れてくる。おお……中がドロドロのホカホカに。ローションを大盤振る舞いしたオナホのように、ヒダヒダツブツブが優しく絡みついてくる。もう硬い印象はあまりない、立派な大人の女の膣になっていた。

ああ……さつきまで処女だったんだぜ……背徳感がたまらん。

くっちやくっちや、ぐっちやくっちや、くっちゆくっちゆ。

中出し精液がペニスに絡んでくると、本格的に姫鳴りがしはじめた。こんな下品な音を立てるオマンコになったのか。ああ……神よ。俺の罪をお許しください。

しかし、まだ突き込むごとに味わいが変わるヴィンテージワインの様な膣よ。

出し入れはスムーズ、しかしヒダヒダはしっかりと絡んでくると、入り口の中着名器の締めりが実にたまらん。

パンパンパンパンパンパンパン。

腰の当たる音が辺りに響き渡る。

ももちゃんの顔は上気して桜色に染まり、目はすこしおどおどとして、涙をまもって光り輝いている。まじまじと見て、やっぱりとんでもない美人だなと再確認する。

「ん……ちゅちゅっ」

俺はそつとももちゃんに口付けをする。柔らかい唇が……マジで柔らかい、凄い！ 無精ひげにまみれた俺の口許なんかとは、同じ生物とは思えないほど違う。

歯磨き粉のミントの香り、薄く口の中を濡らす唾液は甘かった。

「おお、甘露、甘露。こんな甘いキスは初めてだわ」

処女喪失の後にキスするとは、我ながら順番を間違えたが、まずはオマンコが気になったかな。

マンカスベロベロ舐めた口で、ひじよくに申し訳ないが、たぶんファーストキスはいただいた。

口は閉じていたので、顎に手を添え少し開かせる。そのまま口内に舌を突っこんだ。

うおおお舌も柔らかい、何なんだろうこの娘の感触は、この世のものとは思えない。

舌本体はマシユマロの様に柔らかい。味蕾のツブツブは割とはつきりしている。多分、味覚は鋭いんだろう。

しかし、この舌、フェラチオに最適なエロベロではないか、清楚な外見からは想像もつかない最高のラブドールの才能があるな。

俺のおじさん舌で、ももちゃんのエロベロを揉むようになぶる。

甘い……甘いぞ……。これ、ちよつと性的に感じて唾液が甘くなってるな。

「じゅぶぶ……じゅちゆる……じゅぶぶぶ……ふっ……はああ」

呼吸を忘れてももちゃんの舌を味わい、ちよつと息が切れた。

「ももちゃんありがとう……君の処女の身体は一生忘れない」

最高のキスに興奮し、俺の逸物はフルボッキ。一度射精してるとは思えないほど昂たかぶっていた。

「ああ……イキそうだ……ももちゃん……また中に出すよ」

どびゅう！ どびゅびゅびゅびゅ！ どびゆる！ どびゆるるるる！

再び膣内に大量射精をした。さすがに子宮に入りきらず大量に逆流してきた。

ゆつくりと引き抜くと、もちちゃんの聖域は俺のザーメンだらけになっていた。

さて、潮吹きが見たいんでショーツはもちちゃんのポケットに押し入れて、距離を取り、時間よ動け！

「あつふ♡ ああん♡ 何!!♡ イツくうううん♡」

おお……出てる出てる。盛大に気をやったな、さすがにちよつと騒ぎになりかかっていたので、俺は素早くその場を去った。



女学生編 急

もちゃんを美味しくいただいた俺は、そそくさと電車を降り、会社に向かった。

普通に歩いていけば遅刻する時間だったが、時間停止をして歩いていけば余裕だった。

途中、コンビニで精力剤をかつぱらって飲んだ。

「ごきゅ……ごきゅごきゅ……うん、変わらない不味さ、しかし効いてきたぞ」

朝の陽射しがとても心地よかったので、時間を止めたまま、俺は公園の芝生の上でごろ寝した。

うーん、どのくらいこうしていただろう。目を覚ますと寝入ったときから何も変わらない風景があった。

おおーすげえな、時間停止。

腹が減ってきていたので、近くのパン屋に入って、適当にパンを物色して食べた。

キンタマパワー充電完了。現実の世界ではもちゃんとセックスしてから三十分くらいしか経っていないが、俺は丸一日休暇を取ったようなものだった。

さて、会社へ向かうか。

音のない世界をスタスタと歩いていく、そこで同僚を見つけた。池須いけすかない加内というムカつく同

僚だ。いつも俺を下に見て、マウントを取ろうとしてくる、本当に嫌な奴だ。

「無駄無駄無駄」

俺は池須加内の顔面にパンチを浴びせる。そして、財布を物色した。

「おっ！ 結構持ってんじゃん、何だ、風俗にでも行くつもりだったか？」

俺は万札をこっそり抜き取ると、財布を元にもどす。

近くの生垣に隠れると、時間停止を解除した。

「わぶっ！ なっ！ 何だ！」

おおく鼻血がでてるぜ、ざまゝしろ。俺は思わず吹き出してしまった。面白過ぎるぜ時間停止魔法。

池須加内は突然の出来事にパニック寸前という様子だった。ウケる。

ぶっと思わず音を出してしまったが、即座に時間停止して、俺は大爆笑した。

いやゝスカッとした。その気になれば殺すことだってできるだろうが、そこまで悪人にはなれなかった。池須加内にだって人生や家族があるもんな。俺の寛大な心、カッコイイ。

時間停止で固まった池須加内の肩をぽんと叩くと、俺は勤め先の会社のあるビルへ入った。

受付嬢編 序

「おはよー」

時間停止を解除して、俺は受付の蒼井涼子に声をかけた。

「なんだ、○男か……相変わらずキンモイ奴だな」

そうですね、このキンモイ、キンモイ○男君に今から君はがつつりと犯されてしまうんですよ。

蒼井は短大卒でうちの会社に入ったまだ新入りの社員だ。しかし先輩である俺に敬意を払わないどころか、池須加内と同じで俺を見下してくる。

ちよっと思いきらそうと、思っていたところだった。

「蒼井、付け睫毛取れかかってるぞ」

「え……マジ？」

蒼井は慌ててコンパクトの鏡を取り出して、目元をじっと見た。

こいつ、目がパッチリして可愛く見えるが、相当化粧で盛ってる感じがしてた、やはり付け睫毛だったか。ももちゃんとは違うな。

スタイルは良い方だ。ウエストはきゅっと締まっているし、尻もデカイ。胸も悪くはない……が、ももちゃんには劣るな。



「なんだよ○男、なんともなつてねえじゃねえか」

蒼井がキツと俺を睨んでくる。そうそう……反抗心を燃やして来いよ。その方が昂る。

「○男、うぜえ……って、ああ、池須加内さん……どうしたんです？」

そこへ鼻にティッシュを突っこみ、顔色を悪くした池須加内が現れた。

「なんか、急に鼻血が出ちゃって」

「大丈夫ですか」

蒼井のやつ、池須加内相手に甘えた声を出してやがる。ちよつと顔が良いだけでこの待遇の違い。しよせんはビツチか、俺がオマンコしてやるだけでも、ありがたいと思え。

「なんだ○男か……珍しいな、お前が俺より早く出社するなんて」

今日は時間を止めて出社したからな、思つたより早く着いてしまった。

「今日は気分がいいからな、良い事があつたんだ」

「なんだ？ お気に入り風の風俗嬢とでもやれたのか？」

池須加内は俺を虫でも見るみたいな目で眺めるとそう言つた。

「なんでそう思う？」

「いや、なんかすつきりした顔をしているからな」

「確かに……すつきりすることがあつた」

憧れのあのもちちゃんとエッチできたからな。次はお前だ！ 蒼井。

俺はさっさと会話を打ち切ると、自分の所属部署がある三階へエレベーターで向かうふりをした。

「ホント助かりました。池須加内さん、○男のやつが絡んできて」

朝の挨拶しただけで、これかよ！ よし決めた！ 二度と男が近づかないよう、蒼井はガバガバになるまで犯そう。

そう決めると妙にすっきりした気分になった。ビッチに遠慮はいらないからな。

「ふふふ……ふふ……ふふふ」

俺がエレベーターの中で笑うと、名も知らぬ同僚の男は気味悪がって俺を見ていた。たぶん、獣の顔になっているのだろう。

エレベーターが三階に止る。降りるとすぐ目の前のオフィスに可愛原萌子かわいはらもえこがいた。ちなみにこいつがラスボスだ。蒼井は前菜にすぎん。

凄まじいまでのスタイル、もちろん級の乳房を 그레이 のビジネススーツに潜めていて、顔だちも男ならすれ違ったら三度は見返す美人。

俺と池須加内の上司だ。相手はまだこちらに気が付いていない。

俺は時間を止め、カバンからドリンク剤を取り出す。ぐびっと飲むとやっぱり不味い。しかし効き目は抜群だ。

俺は階段へ向かう、降りて一階の受付を目指す。

降りてみると、蒼井はまだ池須加内と話しているところだった。俺には決して見せない笑顔をしてやる。

さあ、これから盛大に犯して、犯して、犯しぬいてやる。覚悟しろ蒼井涼子！

体験版後書き

おはこんばんちわ！ 弾です。

この度はサークルぶるずあいの作品を読んいただき、誠にありがとうございました。久々の時間停止モノ、一応『時間停止してクラスメイトの処女をガバガバにした』の続編となっていますが、前作を読んでいなくても楽しめる内容になっていますので、安心してくださいね。

今回の作品も挿絵はAIですが、画像生成AIは面白いです。このところ毎日のようにAI画像専用投稿サイトちちぶいにイラストを投稿していて、皆様の応援のおかげで度々デイリーランキングに載せていただいています。

さて、初めましての方もいらつしやるかと思しますので、少しサークルの宣伝をさせていただきますい。

同人サークルぶるずあいは今年で十五年目を迎える、小説創作サークルです。

チマチマコツコツと小説を書くというサークルなのですが、さすがに十五年となると過去作もけっこうな数になります。思えば色々な小説を書いてきました。

サークルホームページに行きますと、無料で読める作品も多数頒布、公開されていますので、よろしかったら遊びに来てください。

この小説いい所で終わってますね。有料頒布版ではこの蒼井涼子の他、表紙を飾る女上司、可愛原萌子とのエッチシーンがあります。

気合を入れて書いていますので、よろしかったらFANZAの方でご購入の方検討していただけると嬉しいです。

今後もコツコツと小説を書いていきますので、思いだした時にでもサークルホームページを覗いて見てください。作品に感想などを頂くと泣いて喜びます。

それでは、今回はこの辺で、ごきげんよう！ さようなら！

時間停止して生意気女上司の処女をガバガバにした 一卷

2025年 4月 1日 初版

奥 付

発行 同人サークルぶるずあい
著者 弾
URL <https://bulls-ai.just-size.net/>
E-Mail writer@sample.org



イラスト 弾 (stable diffusion)
URL <http://illustrator.sample.org/>
E-Mail illustrator@sample.org

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(<https://sss.sylphid.jp/>)